

青森県立高等学校将来構想検討会議 中南地区部会（第6回）概要

日時：平成27年10月27日（火）

13：30～15：40

場所：弘前工業高等学校

<出席者>

中南地区部会委員

古山 哲司 地区部会長、佐々木 健 地区部会副会長、木村 浩哉 委員、
清野 眞由美 委員、高橋 和雄 委員、田中 慶一 委員

1 開会

金教育次長から挨拶があった。

2 調査検討

各地区の学校配置等に関する基本的な方向性について

（1）地区部会における検討項目と答申の構成（案）等

事務局から、資料1及び資料2について説明した。

（2）第5回地区部会（合同会議）の概要

事務局から、資料3及び資料3附属資料について説明した。

委員から、次のような意見があった。

○ 資料3の4ページにある「統合を検討する際、必要に応じて地域の意見を伺う協議会等」には、統合のみではなく計画的な募集停止も含まれるのではないか。

→（事務局）中間まとめにおいては「募集停止や統合による学校配置を計画的に進めるためには、必要に応じて地域の意見を伺う協議会等を設置」としているところである。

（3）中南地区の学校配置等に関する基本的な方向性

事務局から、資料4について説明した。

地区部会長から、「中南地区の学校配置等に関する基本的な方向性について、資料6にある各委員から事前にいただいた意見に沿って検討を進めたい。」と発言があった。

「1 背景」、「2 学校規模・配置の状況」、「3 今後の中学校卒業生数の推移と全日制課程の学級数の見込み」について

委員から、次のような意見があった。

- 「2 学校規模・配置」の「(1) 全日制課程の配置状況」に「当地区は他地区よりも職業教育を主とする専門学科の募集割合が高くなっている。」との記述があるが、中南地区では、これまでの経緯もあって以前から他地区とは専門学科の割合が異なっており、統廃合を進める中で割合が高くなってきたわけではない。
- 中南地区においては、「弘前市は私立高校が多いことから、県立高校の普通科の割合が低いこともやむを得ないのではないか」という声も聞かれる。

「4 学校配置等の方向性」について

「(1) 全日制課程の配置等の方向性」

委員から、次のような意見があった。

- 重点校は大学進学をイメージすることになると思う。重点校を何校も設置する事はできないと思うので、重点校以外の高校においても科目の関係で希望する大学を受験できないということがないように、重点校から他の高校に教員を派遣するとか、サテライトで授業を提供するなど、重点校の授業を共有することができれば、大学受験の中心的役割を果たすことができるのではないか。
- 重点校が設置されれば、県全体の学力は底上げされるだろうと思う。人と人との触れ合いを大事にすることはもちろんであるが、今の時代にあっては、インターネットを使った授業も行われていくものと考えられる。
職業教育を主とする専門学科でも同様に、インターネットも使いつつ、合同での実習など、他校との交流が増えていくのではないか。
- 重点校は、多くの人々が納得する学校にしなければならず、そういう意味では弘前高校が妥当だと思う。
- 情報機器の活用は、遠隔授業に限らず、講習や学校行事においても考えられる。
重点校は、地区の大学進学を牽引する学校として期待されるということを見ると、他の普通高校と目に見える連携を図る必要がある。そうしないと、青森県は重点校だけに力を入れていると捉えられかねない。
- 個人的には、併設型中高一貫教育には反対である。導入のねらいをしっかりと持たないと誤解される懸念がある。地区部会として、方向性をどうするのか議論が必要だと感じる。

- 青森県で唯一併設型中高一貫教育を導入している三本木高校の成果や他県の状況を踏まえて、重点校において併設型中高一貫教育の導入を考えてはどうかという議論となったのは、少子化が進み、教育活動が縮小していく中で、優秀な生徒をいかに育てるか、生徒の力を伸ばしたいという発想からである。
- スポーツ科学科については、中学生のニーズがあることから、存続して欲しいという意見があることを確認しておきたい。
- 中南地区に工業科の拠点校を置くことによって、五所川原工業高校と弘前工業高校が連携して、地域を支える技術者の育成や教員の育成ができるのではないかと。
- 弘前工業高校は中南地区の工業高校ということだけでなく、津軽地域の工業教育ということを考えて、五所川原工業高校と連携していかないと成り立たないのではないかと。少子化が進む中で、各校の学科数が少なくなっていく時に、お互いに補うような学科の編成をすれば、生徒が興味のある学習ができる環境を維持できるのではないかと。そのような意味でも、弘前工業高校を拠点校として欲しい。
- 弘前工業高校のレベルは県内の工業高校の中でもレベルが高い。そのような意味でも、拠点校となって、地域に工業人材を送り出す役割を果たして欲しい。
- 中南地区における農業の重要性と農業を進めて行く上で商業的な知識が必要になっていることを合わせて考えると、農業と商業の両方の知識を兼ね備えた農業人の育成が必要である。集約化という表現だと小さくなっていくようなイメージもあるが、連携を取りながら進めていくことは必要な視点であると考えます。
- 集約するということは、学校の規模を小さくしていくよりも、教育内容を幅広く、深くして、教育活動を充実させるため、一定の規模を保つ必要があるということから、「集約」という表現になっているものと思う。
- 高校を卒業しても、また、大学に行っても、自分が将来何になりたいかわからないという人が多い。そのような中で、看護科や家庭科は、在学時から自分の志を持てる科であるので、是非存続して欲しい。職業の選択肢が広がっており、男女の差がなくなっている。男性の保育士も増えており、看護や介護についても、男女に関わりなく、自己実現に向けた学科は必要であると思う。
- 看護科は専攻科まであり、5年間という最短の期間で正看護師の資格を取得することができる。したがって一番費用もかからない。中南地区だけでなく、西北地区や三八地区からも生徒が入学している。病院等と連携した奨学金も整備されている。

○ 全日制については、新たに総合学科を設置するよりも、専門学科として専門性を確保するという表現が良い。

○ 現在も弘前実業高校と黒石高校には複数の学科が設置されているが、平成39年度までにさらに学級減が見込まれる中で、普通科を維持していくことを考えると、普通高校1校を閉校にするよりも、普通高校と専門高校を統合して普通科を維持する必要があるのではないかということから、異なる複数学科を有する高校の設置についても検討が必要という表現になっている。

異なる複数学科を有する高校を設置した場合の注意点として、人数の多い学科だけが中心となり、人数の少ない学科の教育活動に影響が出ることは避ける必要がある。

○ 中学校としては、今後もスポーツ科学科の設置を希望する。弘前実業高校に置きにくい状況になった場合には、他地区では、普通科に併設されていることから、中南地区においても普通高校に設置することも考えられる。

○ 35人学級についての規定はあるのか。

→ (事務局) 高校の学級編制については、「公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律」の第6条に基づき、「1学級の生徒数は、40人を標準とする。」となっている。「ただし、やむを得ない事情がある場合及び高等学校を設置する都道府県の教育委員会が当該都道府県の生徒の実態を考慮して特に必要があると認める場合については、この限りではない。」との規定があり、本県では、実習等を考慮して農業高校、工業高校、水産高校で1学級の生徒数を35人としている。また、1学年2学級から3学級の高校では、多様な生徒が入学し、学力が幅広く、課題も多様化していることから35人としている。1学級の定員については、生徒の実態を考慮して考えるべきものであると認識している。

○ 学年が上がるにしたがって座学の発想になっている。一斉授業であれば、生徒が何人いても可能である。これからはアクティブラーニングが求められており、そのような発想では駄目だと思う。

→ (事務局) 小学校や中学校におけるホームルーム単位での授業とは異なり、高校で授業を行う場合には選択科目で分けられたり、習熟度で分けられたりすることが多くなる。ホームルームは40人であっても、実際の授業では、より少人数となることも多い。

高校において重要なのは、学級数ではなく、生徒数である。ただし、一般の方には学級数の方が分かりやすいことから、規模の標準は学級数で表しているところである。

「(2) 定時制課程・通信制課程の配置等の方向性」

委員から、次のような意見があった。

- 黒石高校定時制課程の募集停止により、地域では、尾上総合高校への夜間の通学については、暗い箇所もあり、駅から近いところに夜間定時制の学校があると良いとの意見があった。
- 弘前市では、今でも弘前中央高校の定時制はなぜなくなったのかという声がある。
 - (事務局) 生徒数が減少する中で、中南地区の定時制課程への入学者数は、尾上総合高校の三部制移行の前後を比較して、減少しておらず、昼間定時制への入学者が増加している実態がある。
- 中学校からすると、尾上総合高校は、様々な課題を持った生徒がやり直しのできる唯一の学校である。午前、午後、夜間いずれも、本人が頑張れば3年で卒業することも可能であり、子どもたちにとっては希望の存在である。
 - しかし、弘前市から女子が夜間に通学するとなると尾上総合高校は選択肢から除かれる。働くために夜間定時制を選択する生徒はほとんどいないが、高校進学の実績としてはある。
- 2年前まで、愛成園に勤めていたが、かつての子どもたちは弘前中央高校の定時制に進学していた。その子どもたちの受け皿が尾上総合高校のⅠ部・Ⅱ部となった。以前であれば、弘前中央高校の定時制に行っていた子どもたちである。かつての夜間から昼間になって、子どもたちにとっては行きやすくなり、しかも3年で卒業できる。しかし、夜間は誰も行きたがらない。
- 夜の安全性を考えると、街中に学校がないといけない。選択肢がなくなったから、尾上総合高校を選ばざるを得ないというのが中南地域の現状である。
- 定時制しか行き場のない生徒もいる。そのような生徒にしてみると、夜間よりも昼間の方が行きやすい。
- 尾上総合高校のⅢ部には女子が通学できず、実際に弘前市や黒石市から入学していないという事であれば、具体的に対応を検討する必要があると思う。そのようなことから、「志願・入学状況を踏まえ」という表現になっているものと思う。
- 弘前市内の夜間定時制が弘前工業高校だけなので、工業科に入学しているということもあるのかもしれないが、その人数も少ない。今年度の入学生は7人で、そのうち女子は1人、全校生徒50人中、女子は11人である。
 - 尾上総合高校三部制ができたことにより、定時制の機能は尾上総合高校に移ってきており、弘前市内で夜間でも学びたいという生徒が工業科に進学している状況である。
 - 工業高校として考えたときには、工業科の授業についてくることのできない生徒もいるということが課題である。実習等では、安全確保のためマンツーマンに近い形で指導に当たっている。

「(3) 学校配置に当たっての留意点」

地区部会長から資料4の表現について意見を求めたが、委員から修正を求める意見はなかった。

「5 その他(主な意見)」について

- 農業高校を卒業後、本気で農業に従事する子どもを育てて欲しい。現実には、求人案内を見て就職すると思うが、入学した学科の分野の仕事に就けるように、高校では本気になって指導して欲しい。

地区部会長から、「資料4については、本日の検討を踏まえ、修正内容等を地区部会長と地区部会副会長とで確認し、来月の検討会議に報告する。」旨の発言があった。

(4) 中南地区における県全体の方向性に対する意見について

事務局から、資料5について説明した。

「1 高等学校教育を受ける機会の確保のため配置する高等学校」

事務局から、資料5の「(1) 配置の考え方」の2つ目のマルの記載について、「合同会議においては、経済的要因について個別に配慮するとなると、公平性の観点から、学校配置として一つの方向性を導き出すことは難しい面があり、個々の事情への対応としては、奨学金を含む通学費補助が考えられるとの整理がなされたところである。」と補足説明があった。

委員から、次のような意見があった。

- 合同会議において、他地区からは、義務教育ではないので補助は不要ではないかとの意見があり、そのような意見もあるのかと感じた。経済的な状況を考慮するのであれば、奨学金での対応になると思う。
- 一人一人の生徒の事情を、個別に全て考えるのは無理がある。経済的な要因に対する支援と学校配置は分けて考える必要があると思う。経済的な要因に対しては、奨学金を手厚くするなど、県と市町村が連携して手立てを考えていかなければならないのではないかと。

「2 統合を検討する際、必要に応じて地域の意見を伺う協議会等」

委員から、次のような意見があった。

- 「協議会」という名称とするかどうかは未確定であるので、「等」が付いているものと思う。役割としては、合同会議でのまとめの方向性で良い。
- 是非、首長を入れた協議会をお願いしたい。

○ 首長が意見を述べたり、首長から意見を聞く機会が必要であると思うが、首長が協議会等の委員となった場合には、首長の発言が当該市町村の意見として捉えられ、他の委員からの活発な意見が出されなくなる懸念はないだろうか。協議会等とは別に、首長から意見を伺う機会を設けた方が、お互いに忌憚なく意見交換ができるのではないか。

○ じっくり地域の意見を聞いて欲しいということである。

→ (事務局) 現在、40市町村を訪問して、中間まとめについて説明しながら、各首長、教育長と意見交換をしているところである。その中で、協議会等の在り方についても意見を伺っており、それらの意見も参考に検討したい。

○ 外部委員等に公募委員を加えると良い部分が大きいか。

○ 弘前市教育委員会における外部委員会では、20～30人中4人程度であるので、特別、支障は感じていない。

○ 教育関係の委員会ではないが、公募枠の委員の中には要望を並び立てる方や、会議の観点から外れた発言をされる方もいる。公募枠を設けることには課題もある。

地区部会長から、資料3附属資料の「中間まとめにおける『学校規模の標準』、『地域の意見を伺う協議会等』、『募集停止等に関する基準』の関係について」、改めて意見を求めたが、委員から修正を求める意見はなかった。

「3 魅力ある高等学校づくりに向けて」

委員から、次のような意見があった。

○ これからの高校教育を考えたとき、新しい学科やコースの創設も考えられるのではないか。弘前市は、りんごと観光の市であるので、観光科、観光ビジネス科のようなものを創設してはどうか。これからは、自分の考えを持って、プレゼンテーションする能力が求められる。外国人も観光客として入ってきており、弘前市をPRできる子どもを育てて、仕事に結びつけられる学科があっても良いのではないかと感じている。

○ 新しい学科ということに限らず、学校間の連携により青森県をアピールする取組や観光資源を活用した活動等が、学校の特色づくりに繋がっていくのだと思う。この地区の観光資源や人的資源を最大限活用する学校間の連携を進めながら特色を作り出していく活動を続ける中で、新しい学科として考えることもあるのではないか。

- 学校単位で様々な取組が行われているが、中南地区の高校同士が連携して、弘前市内の6つの大学がコンソーシアムを作っているように、地域貢献や生徒の成功体験を積み重ねていくネットワークを作りたい。

地区部会長から、「資料5についても、本日の検討を踏まえ、修正内容等を地区部会長と地区部会副会長とで確認し、資料4と併せて来月の検討会議に報告する。」旨の発言があった。

地区部会長から、地区部会での検討を終えるに当たって、各委員から感想を求めた。

- 個人的には併設型中高一貫教育に関して反対であると意見を述べたのは、成績が上位の生徒が附属中学校に入学してしまうからということではなく、中高一貫教育の目的にはエリートを育てるというイメージがあるからである。皆同じく子どもたちを育てていきたいという思いから、反対の意見を述べた。保護者の委員に一度も出席いただけず、意見を聞けなかったことがとても残念である。
会議を重ねるにつれて、自分の考えも変わってきたが、生徒数が減っていくという現実を見ると何とかしなければならないという思いがある。自然に任せて減少していくだけでなく、行政としても弘前市を活性化して人を増やしたいと思う。そこにこれからの高校教育もかかっているのではないかと思う。
- 現実的な人数を見せられた時に、リアルな問題として捉えることができた。専門性のある学校など、どうにか環境を良くしてあげたいと強く思った。自分の活動を通して思うことは、勉強も大事だが、子どもたちには色々な人と関わって、元気に育って欲しいということである。
- 中学校の生徒数の減少する中で、高校の再編という課題がある。高校生は色々な面で活躍しているので、将来の弘前市や中央で活躍するような生徒を育成する学校づくりをして欲しい。併せて、高校に進学したいという子どもたちの望みを叶えられるような高校づくりも視野に入れて欲しい。
- 現在在学している生徒たちには、将来夢を叶えられるように教科指導や実技指導を行っている。これからも地域を支える産業人を育成する教育が必要であると考えている。
- 各委員が、高校のことを大事に思って検討されていると感じた。

3 閉会